

不登校生徒の学習支援について

不登校生徒の状況

当該生徒は、小学校高学年から登校しぶりが見られるようになった。コロナ下の自宅学習時期における生活の乱れが要因となり、学校に登校することが困難になっている生徒である。

具体的な取組

○保護者との連携・学校内での情報共有
日頃より家庭と連絡をとり、近況確認をしたり、各学期に1回、保護者・生徒・担任による三者面談を行ったりした。また、家庭訪問を行ったり、クラスや学校の様子を伝えたり、行事等の参加を促したりするなどを行い、学校・学級との信頼関係の構築を図った。校内では、週に1回校内委員会を開催し、情報交換や今後の対応について検討を行った。

○別室（学年ルーム）での対応

教室での授業参加が困難な生徒の一時的な対応の場として、学年ルームにて別室対応を実施した。学年対応によるオンライン授業を行い、滞在時間や曜日は保護者・生徒と相談して決定した。校内・外の関係機関につなげるまでの、つなぎの役割を果たせるようにした。

○ひまわりルームの開設

今年度より、毎週水曜日の午前中に、学校図書館・図書館準備室で、家庭と子どもの支援員・学校ボランティアによる校内教育支援教室を開設した。生徒の希望に沿った課題に取り組んだり、オンラインによる授業参加を行ったりした。利用に際しては、校内委員会で必要性を検討し、SC面談やひまわりルームの体験を実施し、通室を決定した。



○関係機関との連携

教育支援センター、校内特別支援教室、SC、SSW、教育相談室、子ども家庭支援センター等と連携を図り、個に応じた適切な支援を行えるようにした。

成果

ひまわりルームの開設や別室対応によって、不登校生徒のうち、5名が別室登校できるようになった。また、不登校傾向の初期段階で対応することができ、関係機関と早期に連携することができた。

課題

別室対応での学年教員の負担を軽減するため、ひまわりルームの拡充を図る。また、別室対応が長期化しないよう、手だてを講じる。

「居場所ときずな」を大切にした不登校支援について

不登校生徒の状況

当該生徒は、中学校進学後に不登校状態になった。登校に対する価値観の低さが要因となり、学校に登校することが困難になっている生徒である。

具体的な取組

○校内別室による不登校生徒の支援

保健室や相談室以外の登校しやすい環境として、学校図書館内に安らぎルームを整備した。運営は、家庭と子供の支援員や福祉・心理に造詣が深い退職教員のボランティア協力を得て生徒がいつでも利用できる環境を確保した。



○デジタル機器を活用した学習支援

不登校生徒がいつでもどこでも学習し、即時で振り返ることができるよう自動採点機能付きの CBT (Computer Based Testing) を国語・数学・英語・社会・理科に導入した。生徒の実態に合わせて、自宅で活用したり、校内別室で教員や支援員等と一緒に活用したりした。

○不登校生徒や保護者向け進路説明会

卒業後も支援が続くよう、広域通信制高校やフリースクール等の職員を講師とした進路・個別相談会を 9 月に実施した。実施の際に近隣小学校や市関係機関に広報を行い、多くの教職員の参加があり、校内外で不登校生徒の進路指導について理解を深め、情報共有した。

○不登校が生じない魅力ある学校づくり

共感的な人間関係を構築することを目指し、中学 1 年生全員を対象に、入学時の 5 月は学年集団で、2 学期の 10 月は学級集団で構成的グループエンカウンターを実施し、自己存在感の充実と他者理解の推進を図った。



成果

学習の機会を保障し、当該生徒が学ぶことと自己の将来とのつながりを考える場をつくることができた。また、当該生徒と複数の教員や支援員等との関わりを深めることで、心理面での安定を図り、継続的な関わりができるようになった。

課題

チームで対応していくなかで、デジタル機器を有効に活用したり、生徒が主体の活動をしたりすることができるようにする。

生徒支援調査研究事業指定校の取組について

不登校児童・生徒の状況

当該生徒は、入学時から不登校傾向があった。集団に入ることへの怖さが要因となり、学校に登校することが困難になっている生徒である。

具体的な取組

○「不登校対策委員会」の新設

不登校加配教員中心だった体制から、特別支援教育コーディネーター、各学年の不登校担当教員を中心とする体制への変換を図った。校内別室登校している生徒だけでなく、不登校傾向にある生徒の情報交換・共有も行い、生徒の現状確認や、関係機関との連携等の活性化を図る場とした。

○居場所づくり・きずなづくりの取組

居場所づくりの取組として、校内別室に登校できる環境を整えた。また、生徒と特別支援学級の生徒が、週に1回、給食の準備や昼休みの遊びを一緒に行う交流を始めた。また、きずなづくりの取組として、学校行事の際に実行委員を募り、企画・運営を生徒自らが自主的に行い、生徒同士の交流や肯定的な関わりなどを大切にするようにした。

○校内別室による支援

不登校個別指導計画を作成し、個に応じた指導を行った。また、教員志望やインターンの学生をボランティアとして募集し、校内別室での学習支援を行った。さらに、不登校生徒が校内別室に登校しやすいよう、出入り口を裏口にして他の生徒との接点を減らしたり、登校しているかどうか周囲に分からないよう、靴箱にカーテンを設置したりした。

○デジタル機器を活用した支援

所属学年の授業を、ビデオ会議アプリを利用して視聴できるようにした。広角カメラを各学年1クラスずつ設置し、朝から帰りまでの1日の学習を、すべて視聴できるようにした。



成果

校内別室による対応を継続した結果、不登校出現率が減少した。(令和2年 4.9%、令和3年 2.5%、令和4年 2.2%) また、ビデオ会議アプリを活用して授業を視聴し、小テストや課題を提出できた生徒や授業に参加することができた生徒もいた。

課題

学校内外による相談・指導等を受けていない生徒を解消するとともに、今後も校内別室の環境の充実を図っていく。